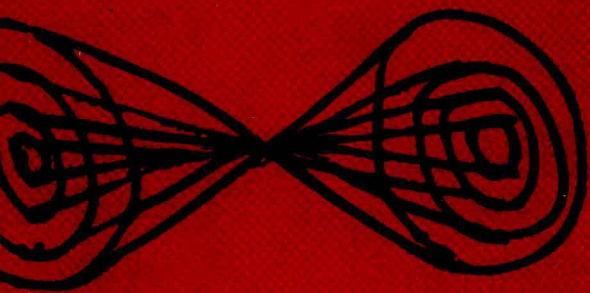


ドストエフスキ

世界文學大系



ドストエフスキー ★★★

カラマーゾフ兄弟 II
地下生活者の手記

世界文學大系

36_B

筑摩書房版

世界文学大系 36B

ドストエフスキー ★★★

昭和35年7月20日発行

定価 450 円

訳 者 小 沼 文 彦

発 行 者 古 田 晁

印 刷 者 山 元 正 宜

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 165768 電話 (291)局 7651

目次

カラマーゾフ兄弟

小沼文彦訳

第九篇 予 審

5

第一〇篇 少年たち

65

第一一篇 兄イワン・フョードロ
ヴィツチ

108

第二二篇 裁判の誤り

197

エピローグ

285

地下生活者の手記

小沼文彦訳

304

ドストエフスキー

トウルナイゼン
国谷純一郎訳

381

解説

唐木順三

420

裝
幀
庫
田
發

ド
ス
ト
エ
フ
ス
キ
ー

★
★
★

カラマーゾフ兄弟

第三部 承前

第九篇 予 審

一 官吏ヘルホーチン出世のいとぐち

商人マローゾヴァの家の固くとざされた門を力いっぱい叩いているところで、いちおう、話を打ちきつておいたピョートル・イリツチ・ベルホーチンは、結局は、もちろん、やつとのこととでその目的を達した。猛烈な勢いで門を叩く音を聞きつけると、二時間ほど前にすっかり胆を冷やされ、興奮と『あれやこれやの心配』のために、いまだに床につく気になれないでいたフェーニャは、また改めてヒステリイを起こすほど度胆を抜かれてしまった。彼女は門を叩い

ているのは（彼が馬車に乗って立ち去ったのをその眼で確かに見たにもかかわらず）またしてもつきりドミトリイ・フォードロヴィツチにちがいないと思つたのである。彼のほかにはあんな『無遠慮』な叩き方をするものはいるはずがないからである。彼女はもう物音に眼をさまして門のほうへ行きかけていた門番のところへとんで行くと、どうか中へ入れないでくれとおがむようにして頼みはじめた。だが門番は門を叩いている男に声をかけてそれが誰であるかを知り、きわめて重大な用件のためにフェードシヤ・マルコヴナに会いたいという相手の申し出を聞いて、結局、門を開けてやることにした。彼はフェードシヤ・マルコヴナの例の台所へ通された。だがその際彼女はピョートル・イリツチに無理に頼んで、『用心』のために門番にも一緒にきてもらった。ピョートル・イリツチはさっそくさまざまな質問を浴びせかけ、たちまちいばん肝心な点をつきとめた。つまり、ドミトリイ・フォードロヴィツチはグルーシエンカをさがしに駆けだすとき、白にはいっていきねを引つつかんでいったが、戻ってきたときにはすでにきねはもっていなかったが、そのかわり血みどろな手をしていたということである。「ええ、まだ血がぼたぼたたれていました、両手から血がぼたぼたと、ほんとにぼたぼたとたれてるじゃありませんか！」とフェーニャは叫んだ。どうやら彼女はその混乱した頭でこの恐ろしい事実をつくりあげてしまったらしかった。

しかし、ぼたぼたたれてこそいなかったが、血みどろな手ならピョートル・イリツチも確かにその眼で見たし、自分も手つだつて洗つてやったくらいである。それに問題はそんなに早く血が乾くものかどうかということではなくて、ドミトリイ・フォードロヴィツチはきねをつかんで、はたしてどこへ駆けだして行つたか、つまり確かにフォードル・ペーヴロヴィツチのところだろるか、それほど断定的な結論をなにをもとにしてくだすことができるかということなのである。ピョートル・イリツチはその問題点を詳細に検討した。そして結局これといってはっきりしたことはなにひとつ突きとめることはできなかつたが、それでもドミトリイ・フォードロヴィツチが駆けつけたのは父親の家よりほかにはありえないという、ほとんど確信に近いものを結論としてひきだしたのであった。してみると、そこできつとなにかが起つたにちがいないのだ。「あのかたがまた戻つていらして」とフェーニャは胸をどきどきさせながらつづくわえた。「あたしがなにかもすつかり白状してしまつてから、今度はあたしがいろいろときいてみましたの。ねえ、ドミトリイ・フォードロヴィツチ、両手が血だらけなのはいつたいどうなさつたんですかって」すると彼は、この血は——人間の血だ、おれはたつたいま人を殺してきたところなんだ、と答えたらしい。「そこでなにかも打ち明けて、すつかり後悔なさつていたようでしたが、またいきなり気違いみたい

に駆けだして行っておしまいになりました。あたしは腰をおろして考えこみました。いったいあの人は気違いみたいになってどこへ駆けだして行ったのだらう？ きつとモークロエへ行つて、奥さんを殺すつもりにちがいないとあたしは考えました。そこであたしは奥さんを殺さないでくださいって頼もうと思つて、そのまま家をとびだして、あの人の下宿をめざして駆けだしました。ところがプロートニコフの店先でひよいと見ると、あの人が馬車に乗つてこれから出かけようとするところじゃありませんか。見ると、手にはもう血がついていませんでしたわ」(フエーニヤはそれに気がついて、覚えていたのである)フエーニヤの祖母にあたる老女中も、できるだけ、孫娘のこの申し立てを裏書きした。それからさらに二、三の質問をしてから、ピョートル・イリツチは、はいつてきたときよりいっそう不安な、落ちつかない気持ちになつてその家を出た。

これからすぐにフョードル・パーヴロヴィツチのところへ行つて、なにか変つたことが起こらなかつたかたずねてみて、もしもなにか変つたことがあつたら、それがなんであるかを突きとめて、これなら絶対間違いがないと確信がついてから、ピョートル・イリツチがはじめからそうするつもりであつたように、警察署長のところへ行くのが、いちばん手つとりばやい、しかも正しい順序のように思われた。しかし夜はあくまでも暗く、フョードル・パーヴロヴィツチの家の門は固くとざされていた。またどんどん叩かなければならない。しかもフョードル・パーヴロヴィツチとは間接的な知合いにすぎないから、さんざん戸を叩いてやつとのことでは開けてもらつたとはいいいが、もしもなにも変つたことがなかつたとしたらどうだらう。あの皮肉家のフョードル・パーヴロヴィツチのことだから夜が明ければさつそく、夜よなかに知合いでもない官吏のベルホーチンが門がこわれるほど叩いて、お前は誰かに殺されはしなかつたかと思はざわざきにきたというアネクドートを、町じゆうにふれまわるにちがいない。そうなつたらスキヤンダルだ！ スキヤンダルこそピョートル・イリツチがこの世のなにもまして恐れているものであつた。だがそれにもかかわらず彼の心をつかんでほなさない好奇心はあまりにも強いものであつた。彼は腹立ちまぎれに地団駄を踏み、またもや自分をのしると、いきなり別の方角へ向つて駆けだした。今度はフョードル・パーヴロヴィツチのところではなく、ホフラーコヴァ夫人の家をめざして駆けだしたのである。もしも夫人が、これこれの時刻に、ドミトリー・フョードロヴィツチに三千里ブリの金をやつたかどうかというこちらの質問に対して、否定的な返事があつた場合には、フョードル・パーヴロヴィツチのところへは寄らずに、そのまますぐに署長のところへ行くことにしよう、もしも反対の場合には、すべてをあしたのことにして、きょうはそのまま家へ戻ることにな

しようとな彼は考えたのであつた。もちろん、彼のような青年が夜よなな、もう十一時に近いという時刻に、ぜんぜん見も知らない上流婦人の家へ押しかけて、ことによると、もうベッドにはいっているかもしれない夫人を叩き起こして、あらゆる状況から判断して奇怪きわまる質問を浴びせかけようとした決心のことには、あるいは、フョードル・パーヴロヴィツチの家に押しかけるよりははるかに不体裁なスキヤンダルをひきおこすおそれがあるとは誰にも容易に考えられることである。しかしながらどうかすると、ことにいまのような場合には、この上な^{まう}几帳面で冷静な人間でもそうした決心をすることがよくあるものである。ましてピョートル・イリツチは、その瞬間、もはやけつて冷静な人間ではなかつたのである！ ますます強く彼の心を支配してやまないうちがちがたい不安の念は、ついに、苦痛を感じるほどに成長し、その意志に反してまで彼の心をしっかりとつかんでほなさないものであつた。それでもその途中ずつと、彼はもちろん、夫人の家をめざして歩いて自分を絶えずのしりつづけてはいたが、『やり抜くんだ、どうしてもしまいまでやり抜くんだ！』と彼は齒をくいしばりながら十べんもくりかえし、そしてついに自分の考えを実行に移し——最後までやり抜いたのである。

彼がホフラーコヴァ夫人の家へ足を踏み入れたのは、かつきり十一時であつた。門のなかへはかなり簡単に入れてもらへたが、奥様はもう

おやすみか、それともまだ起きていらっしやるかという彼の質問に対して、門番は、いつもはこの時刻にたいしておやすみになりますと言うほか、正確な返事はなにひとつできなかつた。「まあ、上へあがつて取りつぎを頼んでみるんですね、お会いになる気があれば、通してくれるでしようし、その気がなければ——お会いになりませうまいよ」というわけである。ピョートル・イリツチは階段をのぼつたが、ここでまたちよつと厄介なことになつた。従僕がどうしても取りつごうとせず、結局、小間使が呼びだされた。ピョートル・イリツチは、この土地の官吏ほど重大な用件でなければ、お伺ひした、これほど重大な用件でなかつたらこんな時刻に邪魔することはないのだが、ぜひ奥様に取りついでいただきたい、とていねいだが、しつこく小間使に頼みこんだ。「ぜひとも、ぜひともこのとおりの言葉で取りついでください」と彼は小間使に念を押した。小間使は引きさがつた。彼はそのまま玄関のホールで待つていた。当のホフラーコヴァ夫人は、まだベッドにははいていながつたが、そのときはもう自分の寝室に引きこもつていた。彼女はさきほどのミーチャの来訪にすっかり心が乱れてしまい、こうした場合にはかならず起こる偏頭痛に今夜も悩まされるにちがいないと覚悟を決めていた。小間使の取りつぎの言葉を聞くと、彼女は胆をつぶして、いらいらとした調子で断つてしまふように言いつけた。そのくせ、一面議もない『この

土地の官吏』が、こんな時刻にだしぬけに訪ねてきたということは、彼女の女らしい好奇心をひどく刺戟したのであつた。しかしピョートル・イリツチも今度は驃馬のように一步も引きさがらうとはしなかつた。面会を拒絶する言葉を聞き終わると、彼は異常なほどしつこい調子でもういちど取りついでくれるように頼み、「非常に重大な用件で出向いたのですから、会つてくださるなければ、あとで後悔なさるかも知れませんよ」と言ひたて、ぜひとも「この言葉をもそのまま」伝えてもらいたいと頼みこんだ。「僕はあのときまるで崖からでもとびおるような気持だつた」と彼はあとになつてよくみんなに話したものである。小間使はびつくりしたように彼の顔を見て、もういちど取りつぐために奥へはいつた。ホフラーコヴァ夫人は度胆を抜かれて、考えこんでしまつた。見たところどんなふうすの人かとたずねると「身なりのとてもしきちんとした、礼儀ただし若いおかたでございます」ということであつた。ここでちよつと断つておくが、ピョートル・イリツチはなかなかハンサムな青年で、自分でもそのことはよく心得ていたのである。ホフラーコヴァ夫人は会つてみることにした。彼女はもう部屋着のガウンを着て、スリッパにはきかえていたが、その上から肩に黒いシヨールをはおつた。「官吏」は客間へ通された。それはさきほどミーチャが通されたのと同じ部屋であつた。夫人はきびしい、詰問するような顔つきで客のほうへ歩

み寄ると、椅子もすすめずに、いきなり「ご用とおっしゃるの？」と切りだした。

「私がお迷惑をもちえりみず参上いたしましたのは、奥様、じつは私どもの共通の知人ドミトリイ・フォードロヴィツチ・カラマーゾフのことについででございます」とベルホーチンは話しはじめたが、この名前を口にすることが早いから、とつぜん夫人の顔にはげしいいらだちの表情が現われた。彼女はあやうく叫び声をたてないばかりに、猛烈な勢いで相手の言葉をさえぎつた。「いつまで、いったいいつまでわたしはあの恐ろしい男のために悩まされなければならぬのでしょうか？」と彼女は夢中になつて叫んだ。

「それにしてもあんまり失礼じゃありませんか、あなた、こんな時刻に、しかも見も知らない婦人の家へ押しかけてきて迷惑をかけるなんて……それもなんの話かといへば、ここで、この同じ客間で、つい三時間ほど前に、このわたしを殺そうとして地団駄を踏んだ男のことじゃありませんか。身分のあるものの家へやつてきて、あんな出て行き方をする男なんてほかにあるものじゃありません。よござんすか、あなた、わたしはあなたを訴えますよ、このままじゃすまされません、さあ、たつたいまここから出て行つてください……。わたしはこれでも母親ですからね、いますぐわたしは……わたしは……わたしは……」

(1) 一八六〇年代に流行したもので作者は黒いシヨールが大好きだつた。

「殺そうとしたんですって！　じゃあの男はあなたまで殺そうとしたのですか？」

「え、それじゃもう誰か殺された人があるんですか？」とホフラー・コヴァ夫人は勢いこんでたずねた。

「奥様、どうかほんの三十秒でけっこうですから、私の申しあげることをお聞きください、かいつまんですっかりご説明いたしますから」とベル・ホーチンはきつぱりとした調子で答えた。

「じつはきょう、午後の五時ごろ、カラマーゾフ君が友人のよしみで、私から十ルーブリの金を借りていきました。あの男が無一文であったことは、私にははっきりとわかっています。ところが今晚の九時ごろ、百ルーブリの札束をむきだしのまま手に握って、私のところへやってきました。おおよそ二十ルーブリ、ことによると三十ルーブリはあったかもしれせん。おまけに両手も顔も血だらけときています。ご当人もまるで気で違ったようなようです。どこでそんな大金を手に入れたのだとききますと、たつたいまこへくる前にあなたからもらってきたのだ、なんでも金鉱とかへ出かけるという条件で、あなたが三十ルーブリの金をだしてくれたのだと、きちんとした返事をするじゃありませんか……」

ホフラー・コヴァ夫人の顔にとつぜん病的な、並々な興奮の色が現われた。

「たいへんですわ！　あの男は自分の年をとつた父親を殺したのです！」と彼女は叫んで、両

手をパチンと打ちあわせた。「お金なんかかけてやりはしません、一文だつてやりはしません！　さあ、早く、早く！……もうなにもおっしゃることはありませんわ！　あの老人を助けなくちゃ、親父さんのところへ駆けつけるんですよ、さ、早く！」

「失礼ですが、奥様、それではあなたはお金はやらなかつたのでございますね？　はっきりと覚えていらつしやいますか、あの男に一文もおやりにならなかつたことを？」

「やりませんとも、やるもんですか！　きつぱりとお断わりしましたわ、あの男にはお金の値打がわからないうんですからね。すると気違ひのようになつて、地団駄を踏んで出て行つてしまいました。いきなりわたしにとびかかつてまいりましたので、わたしはびっくりしてとびのききました……。それどころか、こうなればあなたにあなたに隠してやることはございせんから、あなたを信頼できるかたと見こんでお話しいたしますが、あの男はこのわたしに吐きかけたのでございせんよ、とても本当とは思えない話じゃございせんか？　それはそうと、なにをぼんやり突つ立つてゐるんでしょう？　さあ、どうぞお掛けになって……。ついうっかりしておりました、わたしは……。でもそれよりやはり早く、早く走つていらしたほうがいいですわ。すぐに駆けつけてあの可哀そうな老人を恐ろしい死から救つてあげなくっちゃ！」

「しかしもう殺されてしまつたと思つたから？」

「ああ、なんて恐ろしいことなんでしょう、本当に！　それではこれからどうすればいいのでしょうか？　あなたはどうお思ひになつて、いったいどうしなければいけないんでしょう？」

そう言いながらも彼女はピョートル・イリツチに椅子をすすめ、自分も向かい合つて腰をおろした。ピョートル・イリツチはかいつまんでだがかなり明瞭に事件の経過、すくなくともきよう彼が自分で目撃したその経過の一部を夫人に説明し、彼がたつたいまフェーニヤのころへ行つてきたことを話して聞かせ、例のきねのことも報告した。こうした詳細な報告は興奮した夫人に極度のショックをあたえ、夫人はひっきりなしに叫び声をあげたり、両手で眼のあたりをかくしたりするのだった……。

「どうでしょう、わたしは前からなにかもちやんと見抜いておりました！　わたしは生れつきそうした才能にめぐまれておりましたね、わたしが想像することは、なんでもみんなそのとおりになるのですからね。わたしはいままで何度、それこそ何度あの恐ろしい男を見たかはきつとわたしを殺すにちがいないと考えたものですわ。するとはたしてこのとおりの始末じゃございせんのか……。そりゃあの男が殺したものはこのわたしではなくて、自分の父親にはちがひありませんけれど、それというのも、きつと神様の御手がわたしをお守りくださったからに

きまっています。それにあの男もわたしを殺すのはさすがに恥かしいと思つたのでしようよ。だってわたしはここで、この場所で大殉教者ワルワラの遺品の聖像を、この手であの男の首にかけてやつたんですもの……。そのときのわたしはほんとに死と隣り合せだったんですわね。だってわたしはあの男のそばに、それこそびったりと寄りそつて、あの男はあの男で首をずつと突きだしたままだったんですもの！ ねえ、ピョートル・イリツチ（失礼ですが、確か、あなたはピョートル・イリツチとおっしゃいましたわねえ）……じつはわたしは奇蹟なんでものには信じないのでございますけれど、この聖像と今度のこのまぎれもない奇蹟——これにはすっかり気持ちを動かされてしまつて、いまではまたなんでも信じそうな気がしてまいりましたわ。あなたはゾシマ長老のことをお聞きになりましたか？……でもわたしは、自分でもいまなにを言つていいのかわからないくらいです……。それなのにどうでしょう、あの男は聖像を首にかけたまま、このわたしに吐きかけられたのでございますのよ……。そりゃもちろんつばを吐きかけただけで、殺しはしませんでしたけれど、それから……それからあすこへ駆けつけたんですわ！ だけどわたしたちはどこへ、いったいどこへ行つたらいいのでしょうか、あなたはどうか考えますか？」

「ピョートル・イリツチは立ちあがつて、これからすぐに警察署長のところへ行つて、なにかも話してしまふ、そしてあととはすべて署長に任せるつもりだと言つた。」

「ああ、あの人は立派な、じつに立派な人物です、わたしもミハイール・マカーロヴィツチならよく存じておりますわ。そうです、なにをおいてもあの人のところへ駆けつけることですから、それにしてもあなたはなんてよく頭がはたらくんでしよう、ピョートル・イリツチ、よくまあ、いろんなことに気がおつきになりますわねえ、わたしがあなたなら、とてもそんなところまで頭がはたらきませんわ！」

「それに私も警察署長とはごく親しい間柄ですのよ」とピョートル・イリツチは相変らず立つたまま答えたが、どうやら彼はなんとかして一刻も早くこのひたむきな婦人のそばから逃げだしたくてたまらないようすだった。ところが彼女は別れの挨拶をする暇もあたえず、いつまでも彼を引きとめておくのだった。

「ねえ、よござんすか、よござんすか」と彼女はたわいもないことをしゃべりつつづけるのだった。「これからあちらで見たら聞いたりなさつたことを、ぜひ知らせにきてくださいましね……どんな事実が発見されるか……そしてどんな裁判を受けて、どんな判決がくだされるか。ねえ、ロシヤには死刑というものはないんでしょうかねえ？」とかく、きつときてくださるんですよ、夜中の三時でも、四時でも、四時半でもかまうことはありません……。わたしはどうしても眼をさまさなかつたら、揺すぶつても

起こすように言いつけてくださいな……。いいえ、こうなつたらとても眠れるもんじゃありませんわ。それとも、これからご一緒にまいりましょうか？……」

「そ、それには及びません。それよりもひとつ、万一の用意に、ドミトリイ・フョードロヴィツチに金などは一文もやらなかつたということを、いまずぐちよつと一筆したためてくださると、たぶん、無駄にはならないと思うのですが……万一のことを考えてですね……」

「よろしゅうございますともし！」ホフラーコヴァ夫人は大喜びで事務機のほうへとんでいった。「ほんとに感心してしまいますわ、あなたがこうした問題によく頭がおはたらきになって、なんでもきばきと処理なさるのには、まったく驚いてしまいますわ……。あなたはこの町でお勤めでいらつしやいますか？ あなたはどのような町がこの町にお勤めだなんて、ほんとに聞いただけでも嬉しくなつてしまいますわ……」

「こんなことを言いながら、彼女は二枚つづきの書簡箋の一面に、大きな字でつぎのような言葉を手早く三行ほどしたためた——

『わたしは絶対にあの不幸なドミトリイ・フョードロヴィツチ・カラマーゾフ（なぜならば、なんと申しまでもいまのあの人は不幸にちがいないから）に、本日三千ルーブルのお金を貸しませんでした。そればかりではなく、いまだかつて、一度もお金を貸したことはございません！ この世のありとあらゆる神聖なも

のにかけて、ここにこれを誓います。

ホフラーコヴァ」

「さあ、書けましたわ！」と夫人は急いでピョートル・イリツチのほうへ振り向いた。「これからすぐに行つて、助けてあげてください。これはあなたにとっては偉大な事業ですわ」

そして彼女は彼に向つて三度十字を切つた。彼女は彼を送つて玄関まで駆けだしてきた。

「ほんとに感謝の言葉もございませんわ。あなたがまっさきにわたしのところへいらしてくださつたことを、わたしがいまだくらい感謝しているか、あなたにはとても想像がつきません。どうしていままでお眼にからなかつたのでしようねえ？ これからもわたしの宅へいらしてください。これからもわたしが存じませんわ。それにあなたのような人がこの町にお勤めだなんて、ほんとにうかがつただけでも気がわくわくしてまいりますわ……どんなことにもぬかりがなく、じつによく頭がおはたらきになるんですものねえ……。でもみんながあなたの価値を認めるにちがひありません、きっと結局はみんなあなたを理解するにちがひありませんわ。わたしも自分でできることでししたら、どんなことでもあなたのためにしてあげたいと思いますから、どうぞ……。ああ、わたしはほんとに若いおかたが大好きでございますわ！ わたしは若い世代にすっかり惚れこんでおりますよ。若い人たち——これこそ現代の苦難の道をゆくロシアの基礎でございますも

の、その希望のすべてでございますものねえ……。さ、早く、早くいらつしやることよ……」

しかしピョートル・イリツチはもうそのときは駆けだしていた、でなければ彼女はこんなには早くは彼を放免しなかつたにちがひない。それはともかくとして、ホフラーコヴァ夫人は彼にかなり気持のいい印象をあたえ、こうしたいまわしい事件にまぎこまれてしまつたという彼の不安を、多少やわらわけてくれたほどであった。人間の好みというものはきわめて多種多様なものである、これはわかりきつた話である。「それにあのひとはまだそれほどおばあちゃんじゃない」と彼はいい気持になつて考へた。「それどころか、あのひとの娘と思つてもいいくらいだ」

当のホフラーコヴァ夫人はどうかといへば、もうすっかりこの青年に夢中になつてしまつていた。「いまだときの若いものには珍しい、なんというときばきとした、そつのない人でしょう。それに態度も立派だし、男前もなかなかすてものじゃないし。いまだときの若いものはなにひとつできないつてよく人は言うけれど、そんな人にある青年を見せてやりたいくらいだ」等々というわけである。こんなしだいで「あの恐ろしい出来ごと」のことなぞ彼女はあつさり忘れてしまつたほどであったが、いよいよベッドにはいろうというときになつてはじめて、自分が「死のすくそば」に立つていたことを改めてふと思ひだし、「ああ、ほんとに恐ろしいことだ、

なんてまあ恐ろしい！」と言つた。だがそう言つただけで彼女はすぐさまこの上なく甘い、深い眠りに落ちてしまつた。それにしても、こゝなくだらないエピソードをなにもくどくどと物語ることはなかつたのであるが、しかし私が物語つたような若い官吏と、まだそれほど年をとつていない未亡人と、まだその顔合せが、じつはこの几帳面でてきぱきとした青年の一生を左右する出世のいとぐちとなつたのである。このことはいまでも町の人びとがいかにも不思議なこととしてよく語り合つているし、私もまた、ことによると、カラマゾフ兄弟の長い物語が終つたならば、改めてまたとくに一言するかもしれない。

二一 てんやわんや

この町の警察署長ミハイール・マカロロヴィツチ・マカロフは、七等文官にくらがえした退職陸軍中佐で、やもめ暮しの、なかなか立派な男であつた。彼がこの町へ赴任してきてから僅か三年にしかならなかつたが、主として「社交界のまともな役としての腕」を買われて、いまでは世間一般から好意をもつて迎えられる。彼の家には来客の絶え間がなく、また彼も来客なしでは一日も暮らせないらしかつた。まいにちかならずふたりでも、ひとりでも、誰かしらが彼のところで食事をした。お客がいないと彼は食卓に向かおうともしないのだった。ありと

あらゆる、ときにはまったく思いもよらない口実をもうけて、正式に食事に招待することもよくあった。ご馳走はとくにこったものではなかったが、じつに豊富であった。パイもすばらしいものであった。酒は質はそれほどでもなかったが、そのかわり量ではどこにもひけをとらなかつた。玄関のすぐわきの大きな部屋には玉突台がおかれ、部屋の飾りつけもそれにきわめてふさわしいもので、つまり、四方の壁には黒縁の額におさめられた英国産の競走馬の絵までかかっているという念の入ったものであった。これは、誰でも知っているように、ひとりもの玉突部屋にはなくてはならない装飾のひとつなのである。テーブルはたったひとつであったが、毎晩カードの勝負がおこなわれた。しかしこの町の上流の人びとがひとり残らず、夫人や令嬢同伴でダンスをしに集ってくることも、きわめてしばしば見うけられた。ミハイール・マカロヴィッチはやもめではあったが、もうだいたい前に未亡人になった娘を引き取って、家庭生活をいとなんでいた。この娘は娘で、ミハイール・マカロヴィッチには孫にあたるふたりの令嬢の母親であった。ふたりの令嬢はもう立派に成人して、学校のほうも卒業していた。器量も悪いほうではなかったし、性質も陽気だったので、持参金などはすこしもないことはみんなが知っていたが、それでもこの町の社交界の青年たちはこのおじいさんの家に磁石のようにひきつけられるのであった。ミハイール・マカ

ロヴィッチは仕事にかけてはあまり腕ききといえなかつたが、その職責をはたす点では決してほかのものにひけはとらなかつた。率直に言えば、彼はかなり無教育な男で、自分の行政上の権限すらはつきりとは理解していないいたってのんきな人物であった。現代の政治的改革のいくつかにについても、彼は十分にその意味をつかむことができなかったというわけでもなかったが、どうかすると眼につくほど間違つた理解の仕方をしてることがよくあった。しかしこれはなににもとくに彼が無能であったからではなく、単にそののんきな性格によるものであった。それというのも何事でもとことんまで研究する暇がなかつたからである。「わたしの性質はね、みなさん、どちらかといえば軍隊向きで、文官向きではないのですよ」と彼はよく言っていたものである。農民制度改革の正確な根拠についてさえも、彼はまだはつきりとした決定的な知識をもっていないらしく、いわば、年とともに実際面から自然にそれらの知識を身につけていったようなわけであった。そのくせそれでも彼は地主なのであった。ピョートル・イリツチには、ミハイール・マカロヴィッチの家で今夜もきつと誰か来客にぶつかるにちがいないということがはつきりとわかっていたが、それが誰であるかわからないだけであつた。ところがまるで注文したようにそのとき彼の家には検事と、この町の医務官であるヴァルヴィンスキーが居合わせてカードの勝負をやっていた。こ

の医師はペテルブルクから赴任してきたばかりの、ペテルブルクの医科大学を優秀な成績で卒業した秀才のひとりの若い男であつた。検事、じつは副検事であるが、この町ではみんなに検事と呼ばれているイッポリト・キリーロヴィッチは、この町でも風変わりな人物であつた。まだやつと三十五歳になつたばかりの男盛りであつたが、ひどい肺病に悩まされていた。そのくせ彼の子供のない細君はたいへんな肥つちよであつた。彼はうぬぼれの強い神経質な男で、すぐれた頭腦の持主であり、しかも氣立てはやさしいといつてもいいくらいであつた。彼の性格の欠点は、どうやら、その実際の価値以上に自分を高く評価していることにあるようであつた。いつもそわそわと落ちつきがないように思われるのは、つまりそのためなのである。そればかりではなく彼は、たとえば、心理の動きとか、人間の感情についての特別な知識とか、犯罪者やその犯行を見抜く特別な才能とかに對する、ある高尚な芸術的ともいえるあこがれをいだいていた。この意味で彼は自分をその職場でいつも除け者にされて不遇な地位にあると考へ、上司たちは自分の真価を認めようとしな、自分には敵があるのだと思ひこんでいた。そのため気がはれないときなどは、こんな椅子はすてて刑事事件専門の弁護士になつてしまふと脅し

(一) 帝政ロシアの官吏の官等は文官は一四、陸軍武官は一三、海軍武官は九階級にわかれていた。陸軍中佐は文官では七等官にあたる。

文句をならべることさえもあつた。思いがけな
いカラマーゾフ一家の父親殺しの事件は彼の全
身をふるいたさせた——『これこそ全ロシアに
知られたるべき大事件である』と考へたのであ
る。だがどうやらまた私は先まわりをしている
ようだ。

その隣りの部屋では、つい二カ月前ほど前にベ
テルブルクから赴任してきたばかりの、この町
の若い予審判事ニコライ・パルフェーノヴィツ
チ・ネリュードフが令嬢たちのお相手をしてい
た。あとで町の人たちは『犯罪のおこなわれ
た』夜に、まるで申し合わせたようにこうした
人びとが警察当局者の家を集つていたことを話
題にして、奇異の感さえもいだいたものである。
だがこれははるかに単純な、きわめて自然のな
りゆきであつた。イッポリート・キリーロヴィ
ツチは細君がその前日から歯痛に悩まされて
いたので、どこかそのうなり声の聞こえないと
ころへ逃げださなければならなかつた。医者
は夜になるとカードの勝負をしなければ居ても立
つてもいられない性分であつた。ニコライ・パ
ルフェーノヴィツチ・ネリュードフとなると、
これはもう三日も前からこの晩だしぬけにミハ
イル・マカロヴィツチのところへ押しかけ
ることに予定をたてていたのである。つまり姉
娘のオリガ・ミハイロヴナに『僕はあなたの秘
密を知つてますよ、きょうはあなたの誕生日で
しょう、町じゅうの人をダンスによばなければ
ならないので、わざとそれを町の人にかくして

おこうとなすつたんでしょう、僕にはちゃん
とわかつていますよ』と言つて、不意打ちをくら
わせてびっくりさせてやろうというわけであつ
た。あのひとの年のことを遠まわしにはめか
して、笑い話の種にしてやろう、年がばれるの
をひどく気にしているらしいが、こつちは彼女
の秘密を握つていゝのだから、あしたになつた
らみんなに話してやると言つて脅かしてやろう
等々という考へだつた。このまだ年の若いチャ
ーミングな青年は、そういう点にかけてはなか
なかのいたずら小僧だつたのである。この町の
婦人たちは彼のことをいたずら小僧と呼んでい
たが、どうやら彼にはそれがひどく気に入つて
いるようすだつた。とはいふものの、彼はきわ
めて上品な、上流家庭の出身で、立派な教育も
受け、やさしい感情の持主であつた。なかなか
の享楽主義者ではあつたが、いたつて罪のない
しごく礼儀たらしいエビキュリヤンだつたので
ある。見たところでは彼は背も低く、弱々しい、
きゃしゃなからだつきをしていた。そのほつそ
りとした蒼白い指には、いつも非常に大きな指
環がいくつも光つていた。ところがその職務を
遂行する段になると、まるで自分の使命と義務
を神聖なものと考えているように、うつて変つ
てひどくもつたいぶつた態度になるのであつた。
ことに平民出身の殺人犯やその他の犯罪人を訊
問するときには、それで相手をとまどいさせる
のが得意で、また事実、相手の胸に尊敬とま
はいわれないまでも、ともかくも一種の驚きの念

をうえつけるのであつた。
ビョートル・イリツチは署長の家へはいると、
なんのことはないたちまちあつげにとられてし
まつた。意外にもみんながすでになにもかも承
知していることがすぐわかつたからである。
事実、カードはほうりだされ、総立ちになつて
評議をしているところだつた。ニコライ・パ
ルフェーノヴィツチまでが令嬢たちはそつちのけ
にしてその場に駆けつけ、きわめて戦鬪的な緊
張した顔つきをしている。ビョートル・イリツ
チがそこで耳にしたのは、フョードル・パーヴ
ロヴィツチ老人が本当にその晩、自宅で何者か
に殺害され、金品を強奪されたという、気の遠
くなるようなニュースであつた。それは彼がや
つてくる直前に、つぎのようにしてもたらされ
たニュースであつた。
塀のわきで打ち倒されたグリゴリーイの妻、
マルファ・イグナーチエヴナは、自分のベッド
でぐつすり眠りこんでいて、当然そのまま朝
まで眠つていてもなんの不思議もないのに、な
ぜか、ふつと眼をさました。彼女が眼をさまし
たのは、意識を失つたまま隣の部屋に横たわ
つていたスマルジャコフの、痲瘋の発作にとも
なり恐ろしい叫び声のためであつた——その叫
び声とともにいつもきまつて痲瘋の発作がはじ
まることになつていて、そのたびごとにマル
ファ・イグナーチエヴナは一生のあいだ、つね
にその叫び声にひどくおびやかされ、病的な刺
戟を受けたものである。彼女はどうしてもその

叫び声に慣れることができなかつた。彼女は寝ほけまなこでとび起ると、ほとんど無意識にスメルジャコフのやすんでいる小部屋へ駆けつけた。だがそこはまっ暗で、ただ病人が恐ろしい声をたてながらもがきはじめた物音が聞こえるだけであつた。そこでマールファ・イグナーチエヴナも思はずきやつと叫んで、大声で夫の名前を呼びはじめたが、とつぜん、そいういへば自分がとび起きたときベッドの上にグリゴリーイの姿が見当らなかつたようだったと気がついた。彼女はベッドのほうへ駆け戻り、改めて手さぐりで確かめると、はたしてベッドはからっぽである。してみると、どこかへ行つたのだ、それにしてもいったいどこへ？ 彼女は入口の階段へ駆けだして、階段の上からおずおずと夫の名前を呼んでみた。もちろん、返事はなかつたが、そのかわり夜の静けさを破つて、どこか遠い庭先のほうから妙な呻き声が聞こえてきた。彼女は耳をすました。呻き声がふたたびくりかえされ、それが確かに庭のほうから聞こえてくることのはつきりとわかつた。「たいへんだ、まるでリザヴェータ・スメルジャンチャヤのとくとそっくりじゃないか！」という考えが彼女の乱れた頭をかすめすぎた。彼女はおずおずと階段を下りて、視線をこらして見ると、庭へ通ずる木戸が開け放しになつてゐる。「きつと、うちのひとはあすこにいるにちがいない」と彼女は考へて、木戸のほうへ歩み寄つた。するととつぜんグリゴリーイが、弱々しい、呻くよう

な恐ろしい声で「マールファ、マールファ！」と彼女を呼んでいる声が、今度ははつきりと耳にはいった。「神様、どうかなにも変つたことがありませぬように」とマールファ・イグナーチエヴナはつぶやいて、声のするほうへ駆けつけた。こうして彼女はグリゴリーイを見つけたのである。しかし彼女が見つけた場所は、彼が打ち倒された塀のそばではなくて、塀から二十歩も離れたところであつた。これはあとでわかつたことであるが、彼は意識を取り戻して、そこまで這つてきたのである。おそらく、何度か意識を失つて、前後不覚になりながら長いこと這いまわつたものにちがいない。彼女はすぐに、彼が全身血まみれになつてゐるのに気がついて、思はずきやつと叫んだ。「殺したんだ……父親を殺したんだ……なにをわめてゐるんだ、ばか……早く、誰かを呼んでくるんだ……」とグリゴリーイは小さな声で、とりとめのないことを口走つた。しかしマールファ・イグナーチエヴナはいっこうに言うことをきかず、なおも叫びつづけていたが、ふと見ると、主人の部屋の窓が開け放しになつていて、窓から明りもれられているではないか。そこで急いで窓のほうへ駆け寄ると、フォードル・パーヴロヴィッチを呼びはじめた。だが、窓のなかをのぞきこむと、恐ろしい光景が眼にはいった。主人が床の上に、あおむけに倒れて、ピクリとも動かないのだ。薄色のガウンと白いシャツの胸のあたりが血に染まつてゐる。テーブルの上のろうそくが血と、

フォードル・パーヴロヴィッチのじつと動かない死顔を明るく照らしてゐる。それを眼にして極度の恐怖におそわれたマールファ・イグナーチエヴナはハツと窓からとびのくと、いきなり庭の外へ駆けだした。門のかんぬきをはずす手もどかしく、彼女はいちもくさんに裏口から隣家のマリーヤ・コンドラーチエヴナのころへ駆けこんだ。隣りの家では、母親も娘もそのときはもうとくに眠つてゐたが、けたたましく、力いっぱい窓の錠扉を叩く音と、マールファ・イグナーチエヴナの叫び声に眼をさまして、窓のところへとびだしてきた。マールファ・イグナーチエヴナは金切り声をはりあげて、しどろもどろな調子で、だが要点だけは抜かさずに事情を話して、助力を求めた。ちようどその夜、隣りの家には宿無しのファマーが泊り合せてゐた。ふたりはすぐに彼を叩き起こし、三人そろつて犯罪の現場へと駆けつけた。その途中でマリーヤ・コンドラーチエヴナは、さきほど、九時ごろに、隣家の庭のほうで恐ろしい、隣り近所にひびきわたるような叫び声が聞こえたことを、やつとこのこと思い出した——もちろん、まさしくそれこそ、すでに塀の上に馬乗りになつてゐたドミトリー・フォードロヴィッチの足にしがみついて「親殺し！」と叫んだとき、グリゴリーイの叫び声にちがひなかつた。「誰かがひと声きやつと叫んだかと思つと、それつきり静かになつてしまいましたわ」と走りながら、マリーヤ・コンドラーチエヴナがそれ

を証拠だてた。グリゴリーの倒れている場所へ駆けつけると、ふたりの女性はフアマアの助けをかりて老人を離れへ運んだ。灯りをつけて見ると、スメルジャコフの発作はまだおさまらず、眼をひきつけ、口から泡を吹いて、自分の部屋でもがいている。すぐに酔をませた水でグリゴリーの頭を洗った。この水のおかげで彼はすっかり正気を取り戻し、すぐさま「旦那は殺されたのか、どうなんだ？」とたずねた。ふたりの女性とフアマアはそこで主人のようすを見に出かけたが、庭へはいってみると、今度は窓ばかりではなく、この一週間というものでこの主人がまればん宵のうちから自分の手で固く戸締りをして、グリゴリーでさえもたとえどんな理由があつてもドアを叩くことを許されなかつた屋内から庭へ通ずるドアまで開けつづけるけになつてゐるのが眼にはいった。そのドアが開け放しになつてゐるのを見ると、三人のもの——ふたりの女性とフアマアは、たちまち主人の部屋へはいるのが急にこわくなつてきた。

『あとでなにか面倒なことになるてはいけない』と思つたのである。三人が戻つてくると、グリゴリーはすでに警察署長の自宅へひと走り行つてくるように言いつけた。そこでマリーヤ・コンドラーチエフナが走つて行つて、署長の家に居合わせた人たちの度胆を抜いたというわけである。それはピョートル・イリツチのやつてくる僅か五分前のことであつた。したがつて彼は単に自分だけの臆測や推論によつて出頭した

のではなく、疑う余地のない目撃者として、そのくわしい説明によつて、誰が犯人であるかという一同の推察をさらに裏書きすることになつたのである（とはいうもの、その最後の瞬間まで、彼は心の奥底では、相変らずさうした推察を信じてることをこぼんでいた）。

全力をあけて活動を開始することにきまつた。四人の証人についての証拠固めのはうは、ただちに副署長に一任され、ここでくどくど説明することはやめにするが、一定の手続きをふんで、フョードル・パーヴロヴィツチの家に乗りこんで、現場の検証に取りかかった。仕事に熱心でまだ新米のこの町の医務官は、自分から無理に頼みこむようにして署長や、検事や予審判事に同行することにした。あとはいつまんで話すことにする。フョードル・パーヴロヴィツチは、頭を打ち割られてもはや完全に絶命していることがわかつた。だが兇器はなにか？ おそらくそれはそのあとでグリゴリーを傷つけたのと、同じ兇器にまず相違あるまい。必要な応急手当を加えられたグリゴリーの口から、弱々しい、とぎれがちな声ではあつたが、彼が危害を受けるときのかなりままとまりのある話を聞きだすことができたので、その兇器もすぐに発見された。角灯をつけて扉の近くをさがしはじめると、庭の小径のいちばん眼につきやすいところに無造作に投げだされた銅のきねが見つかつたのである。フョードル・パーヴロヴィツチの倒れていた部屋のなかには、これといつてとくに乱れた

ところはすこしも見当らなかつたが、スクリーンのかげの、彼のベッドのそばの床の上に、『わが天使ブルーシエンカへのプレゼント、ここへ来る気になつたならば』と書いてある、紙の厚い、事務用のサイズの大きな封筒が落ちてゐるのが発見された。そして下のほうには、おそろくあとでフョードル・パーヴロヴィツチが書きくわえたものであらう、『わが小さきひなどりへ』という言葉が書いてあつた。封筒には赤い封蝋で大きな封印が三つおされてあつたが、封はすでに切られて、中はずからつぽで、金は持ち去られていた。床の上には封筒を結んであつた、細いバラ色のリボンが落ちていた。ピョートル・イリツチの申し立てのなかに、検事と予審判事にとくに強い印象をあたえたものがひとつあつた。それはほかでもない、ドミトリー・フョードロヴィツチはきつと夜明け前に自殺するにちがいないという臆測である。つまり彼は自分でもその決心を固め、自分の口からそのことをピョートル・イリツチに話したり、眼の前でピストルに装填をしたり、遺書を書いてポケットへしまつたりした等々という事実である。それでもやはり相手の言葉を信じようとしなないピョートル・イリツチが、これから誰かのところへ行つて、なにかかも話して自殺を妨害すると言つておどかさず、当のミーチャはにやりと笑つて「間に合うもんか」と答えたというのである。してみると、すぐに現場へ、モークロエへ急行して、犯人は、ことによると、実際に自殺